

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■ 第4章「東電の敗北」

3月14日午後6時2分、福島第一

原発2号機に海水を注入するため、

原子炉の減圧開始に成功した。減圧

開始時に5・4が燃えた炉内圧力

は急激に低下していった。

既に2号機側では消防車2台を

連結して海水注入の準備が整ってい

た。消防車のポンプは起動しており、

原子炉圧力が1が燃程度まで下られ

ばポンプの圧力が勝って水は入る

はずだ。

午後6時2分、原子炉水位を監視

していた1、2号機中央制御室から

発電班に連絡が入った。

「炉水位、TAEV1チヌ370

消防ポンプ燃料切れ



事故を教訓に福島第一原発で行われた消防車による原子炉注水訓練
＝2011年10月(東京電力提供)

あれほども言ったのに

「だから、あれほども言ったじゃね

を隣んでタイヤがパンクし、隊員は

ホリタシクに軽油を入れ、歩いて消

防車に向かった。

その光景を見ていた第2復旧班長

甲卓の近くにいた総務班副班長の

小妻敏子(55)は、総務班長が耳打ち

した。「あまりいい状況じゃない。吉

田さんからの指示です。構内のバス

をできるだけ多く確保してください

」周囲に悟られないようにという

密命だった。吉田が退避を考え始め

ている。小妻はそう思った。

「現場に行くのでバスを貸してく

ださい」

小妻は免震棟内の協力企業を回っ

た。「現場に行く」というのはど

きについたうそだった。だがどの企

業の責任者も理由を察して、何も聞

かずにはバスを貸してくれた。こうし

て退避のための「足」が用意された。

だが、炉内の燃料が溶ける。だが々

通信 高橋秀樹)

「何？」

午後3時半に起動した消防車2台

のポンプは燃料切れで停止してい

た。「さすがにこれはもう終わっ

た。ポンプは燃料切れで停止してい

「さすがにこれはもう終わっ

た。ポンプは燃料切れで停止してい

「何？」

午後3時半に起動した消防車2台

のポンプは燃料切れで停止してい

た。「さすがにこれはもう終わっ

た。ポンプは燃料切れで停止してい

「何？」

午後3時半に起動した消防車2台

のポンプは燃料切れで停止してい

た。「さすがにこれはもう終わっ

た。ポンプは燃料切れで停止してい